



宇宙に生まれた ひとつの音

学校長

飯山 等

生きてゆくことの難しさが指摘され、個の向上が強い言葉となって喧伝される現代、それは一方で個を孤に分断する力として作用しています。そのような時だからこそ、自らを大きな流れの中で感じて、自他共に生きている意味を身に深く感受することの大切さを思います。親鸞聖人の心を自らに深く受けとめて、その教えを、困難な時代に生きる人々の灯として広く開かれた蓮如上人は、祖師のいのちの根本の有りを、「御同朋・御同行とこそかしずきて」(御文)と確かめ、人と人が尊び合う関係を築くことを深く願って生きてゆかれました。想えばその時代は日本の歴史の中でも、生きることの困難が誰びとも深く浸潤した時代でした。そのような時代社会であればこそ、「かたがた」との交わりをさらに深く密なることとして、共なる敬愛を根にした、それぞれが「御かたがた」(蓮如上人御一代記聞書)とうなずき合う世界の構築を表心から願われたのです。友(=同朋・同行)という開けが、《御》のところで開かれる。《御》のところを開く、真に尊び合う関係が現成することを心から希求されたのです。そしてそのことは、私たちの目を引く美しい花や見事な果実が、譬や帯によって支えられ育まれてのすがたであるように、すべてのモノやコトを問い意味づけようとする眼差しが大きく転ぜられて、すべてのモノやコトにとって私とは、という逆向きの問いの視野が開かれることによって、はじめて成り立つのであることも深く心に受けとめていかれたのです。現実が問題として立ち現れ、それへの対応を強く求めてくると、つい、忙しい、慌たしいという思いが脳裏に明滅します。そして、問題への即時的な対応の積み重なりが、いつしか「心を亡くす」「心が荒れる」事態を引き寄せてしまいます。そのような有りに陥ってはいないかと、自身に問い迫る声が聞こえてきます。振り返ればそのようなとき、自らの内に向かって静かに沈潜する時を求めて、私はいつも自然に好きな詩人の本を手にとっているのです。ゆっくり、ゆっくりと読み進めます。一篇を、一語を味わいます。そのなかの「音楽」と題された一篇、「穏やかに頷いて／アンダンテが終わる／二つの和音はつかの間の訪問者／意味の届かない遠方から来て／またそこへ帰って行く／幻のようにか細い糸の端で／蜘蛛が風に揺れている／それを見つめているうちに／フィナーレが始まる／最後の静けさを先取りして／考えていたことが／時の洞窟に吸いこまれ／人はなすすべもなく生きている／せせらぎのように清らかに／世界を愛して」。さらに数頁後の一篇『音楽ふたたび』の後半、「初めての音はいつ生まれたのか／真空の宇宙のただ中に／なにものかからの暗号のように／ひそかに謎めいて／どんな天才も音楽を創りはしなかった／彼らはただ意味に耳をふさぎ／太古からつづき静けさに／つつましく耳をすましたただけ」(谷川俊太郎『聴くと聞こえる』創元社刊より)。……あなたは、宇宙に生まれたかけがえのない一つの音。そのあなたに耳をすましてみよう。

